

協伸商会穀物レポート [KKR] Vol. 057

(2022/23年度 USDA米国農務省 4月11日発表)

[ハイライト]

① 今年度北半球収穫はほぼ終了、南半球は生育期～収穫期を迎えほぼ全体の大勢は見えてきた

今年度も終盤を迎える中で、トウモロコシは早魃等により米国が348百万トと前年比9%減/ARG37百万トと同31%減/またUKR27百万トと同36%減、その結果全体では下記に示すように縮小均衡となった。小麦は対照的に生産/消費/貿易量とも拡大基調を維持し世界的食料として普及進展。大豆もBRAの急激な生産拡大/中国の1億ト近い輸入の結果、各数値が史上最高を記録。価格は昨年のロシアのUKR侵攻時に比べ落ち着いてきたが全体的にまだ2021年水準を上回っている。

② ARGは60年に一度の大早魃&減産、ロシア/豪州は史上最高の大豊作が確実

ARGはラニーニャ現象の為60年に一度と言われる大早魃に見舞われ、上記とうもろこしと同様大豆も減産免れず現地穀物取引所週報では25百万トと前年比44%減となっている。一方、ロシア小麦は産地天候に恵まれ生産量92百万ト（前年比22%増）、大麦22百万ト（同23%増）と史上最高/小麦輸出は45百万トとEUを抜いて世界最高数量の見込み。また豪州も3年連続の豊作が確実で小麦は39百万ト（同8%増）、輸出29百万ト（4%増）と史上最高見通し。

③ 戦線膠着状態のUKRの穀物生産は来年も厳しい状態続き、「黒海回廊」期間延長も不透明

UKRとうもろこし/小麦の生産/輸出量は別表の通り其々27/26百万ト、21/15百万トで前年比凡そ30-40%減となり、農業分野の総被害額は87億ドル（1.1兆円）と報告されている。また来年度作付面積は冬小麦417万ha（前年比83万ha減）、とうもろこし362万ha（同45万ha減）とされ生産資材/労力不足等も相まって厳しい状況が続いている。また「黒海回廊」も3/19延長されたがその期間はUKRは120日、ロシアは60日と報道され状況は不透明。2月末までの累計輸出量は2,272万ト（コーン1,102/小麦630万トその他）。仕向地は中国が最大、次にスペイン/イタリア/エジプトとなっている。

1、世界穀物需給の概要

① 生産量：	2,735百万ト	（前年比2.2%	減 ↓	、	前月比0.1%	減 ↓	）
② 消費量：	2,764百万ト	（前年比1.4%	減 ↓	、	前月比0.0%	⇒	）
③ 貿易量：	482百万ト	（前年比5.9%	減 ↓	、	前月比0.3%	減 ↓	）

2、とうもろこし

① 生産量：	1,145百万ト	（前年比6.0%	減 ↓	、	前月比0.3%	減 ↓	）
② 消費量：	1,156百万ト	（前年比3.9%	減 ↓	、	前月比0.1%	減 ↓	）
③ 貿易量：	171百万ト	（前年比15.5%	減 ↓	、	前月比0.5%	減 ↓	）

④ 概況：世界生産量はARGが早魃深刻化の為先月比3百万ト減少し37百万トまで落ち込んだこと等から下方修正された。世界消費量も振るわない。貿易量もそれに連動し減少、前年2億トを超えた実績が今年度は上記の通り171百万トと約3千万ト▼15%の大幅減少が確実である。期末在庫量は生産量が消費量を下回ったことから前年比約11百万ト4%近く減少した。

期末在庫は295百万ト（前年比3.8%減）/在庫率25.5%。うち中国207百万ト、占有率はナント70%。

⑤ 価格：\$6.44/Bu（前年\$7.35/Bu / 前月\$6.45/Bu）と前月比\$0.01 下落。

3、小麦

① 生産量：	789百万ト	（前年比1.3%	増 ↑	、	前月比0.0%	⇒	）
② 消費量：	796百万ト	（前年比0.3%	増 ↑	、	前月比0.4%	増 ↑	）
③ 貿易量：	213百万ト	（前年比4.8%	増 ↑	、	前月比0.6%	減 ↓	）

④ 概況：世界生産量はとうもろこしとは逆に増加し8億トに手の届くレベルまで拡大している。これを小麦消費の世界的拡大が牽引している構図が鮮明であり、貿易量が2億トを超え前年比5%近く増加。結果期末在庫量は7百万ト3%近く減少の見通し。期末在庫は265百万ト（前年比2.6%減少）/在庫率33.3%。うち中国140百万ト、占有率53%と過半を占める。

⑤ 価格：\$6.76/Bu（前年\$9.85/Bu / 前月\$6.96/Bu）と前月比\$0.20 下落。

4、大豆

① 生産量：	370百万ト	（前年比2.7%	増 ↑	、	前月比1.5%	減 ↓	）
② 消費量：	366百万ト	（前年比0.8%	増 ↑	、	前月比1.4%	減 ↓	）
③ 貿易量：	168百万ト	（前年比9.1%	増 ↑	、	前月比0.2%	減 ↓	）

④ 概況：世界生産量はARGがとうもろこし同様早魃深刻化の為前月比6百万トの衝撃的減少で27百万トまで激減。しかし隣接するBRAは増産維持の為史上最高見通しは変わらず。貿易量は前月比微減したが前年比では9%超えとうもろこしとほぼ並ぶ。期末在庫は100百万ト（前年比0.6%増）/在庫率27.4%。うちBRA33/ARG18百万トで半分以上を占める見通し。

⑤ 価格：\$14.93/Bu（前年\$15.83/Bu / 前月\$15.31/Bu）と前月比\$0.38 下落。

以上

世界の穀物・大豆等の需給

2023年4月11日
米国農務省発表： 単位１００万トン

主要穀物世界の需給							
			生産量	総供給量	貿易量	総使用量	期末在庫量
全穀物	2020/21		2,725	3,544	488	2,747	797
	2021/22		2,796	3,593	513	2,805	788
	2022/23	3月	2,738	3,526	484	2,763	763
	2022/23	4月	2,735	3,523	482	2,764	758
小麦	2020/21		774	1,074	203	788	286
	2021/22		779	1,065	203	793	272
	2022/23	3月	789	1,060	214	793	267
	2022/23	4月	789	1,061	213	796	265
粗粒穀物 (とうもろ こし等) 注1	2020/21		1,442	1,779	234	1,456	323
	2021/22		1,503	1,826	253	1,492	334
	2022/23	3月	1,440	1,773	215	1,450	322
	2022/23	4月	1,436	1,770	214	1,448	322
米	2020/21		509	691	51	504	187
	2021/22		514	701	57	519	182
	2022/23	3月	510	693	55	520	173
	2022/23	4月	509	691	56	520	171
大豆	2020/21		369	464	165	363	100
	2021/22		360	460	154	360	100
	2022/23	3月	375	474	168	371	103
	2022/23	4月	370	469	168	366	104

世界のとうもろこし需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	3月	305.69	1,147.52	174.48	1,156.75	174.71	296.46
	4月	306.91	1,144.50	173.97	1,156.06	173.79	295.35
アメリカ	3月	34.98	348.75	1.27	303.93	46.99	34.08
	4月	34.98	348.75	1.02	303.67	46.99	34.08
アルゼンチン	3月	1.49	40.00	0.01	12.00	28.00	1.49
	4月	1.49	37.00	0.01	12.00	25.00	1.49
ブラジル	3月	3.75	125.00	1.30	73.00	50.00	7.05
	4月	3.97	125.00	1.30	73.00	50.00	7.27
EU	3月	9.94	54.20	23.50	78.10	2.20	7.34
	4月	9.93	52.97	24.50	78.10	2.20	7.10
日本	3月	1.39	0.01	15.00	15.00	0.00	1.40
	4月	1.39	0.01	15.00	15.00	0.00	1.40
中国	3月	209.14	277.20	18.00	297.00	0.02	207.32
	4月	209.14	277.20	18.00	297.00	0.02	207.32
ロシア	3月	0.93	14.00	0.05	10.90	3.30	0.78
	4月	0.93	15.83	0.05	11.70	4.10	1.01
ウクライナ	3月	5.09	27.00	0.00	6.20	23.50	2.39
	4月	6.09	27.00	0.00	6.20	25.50	1.39

世界の大豆需給							
期首在庫			生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	3月	99.00	375.15	165.39	371.13	168.40	100.03
	4月	99.73	369.64	164.76	365.83	168.00	100.29
アメリカ	3月	7.47	116.38	0.41	63.69	54.84	5.72
	4月	7.47	116.38	0.41	63.69	54.84	5.72
アルゼンチン	3月	23.90	33.00	7.25	40.95	3.40	19.80
	4月	23.90	27.00	8.30	37.70	3.40	18.10
ブラジル	3月	26.89	153.00	0.75	56.40	92.70	31.54
	4月	27.60	154.00	0.75	56.90	92.70	32.75
中国	3月	31.40	20.28	96.00	113.30	0.10	34.28
	4月	31.40	20.28	96.00	112.30	0.10	35.28
EU	3月	1.55	2.47	13.90	16.23	0.25	1.44
	4月	1.62	2.44	13.90	16.23	0.25	1.48

世界の小麦需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	3月	271.45	788.94	208.41	793.19	213.93	267.20
	4月	272.09	789.02	206.30	796.06	212.71	265.05
アメリカ	3月	19.01	44.90	3.27	30.62	21.09	15.47
	4月	19.01	44.90	3.40	29.94	21.09	16.28
アルゼンチン	3月	2.35	12.90	0.01	6.25	6.50	2.51
	4月	1.93	12.55	0.01	6.45	5.50	2.53
オーストラリア	3月	3.43	39.00	0.20	8.50	28.50	5.63
	4月	3.43	39.00	0.20	8.50	28.50	5.63
カナダ	3月	3.66	33.82	0.60	9.55	25.00	3.54
	4月	3.66	33.82	0.60	9.55	25.00	3.54
EU	3月	13.36	134.70	9.00	109.00	37.00	11.06
	4月	13.32	134.34	10.50	111.00	35.00	12.16
中国	3月	136.76	137.72	10.00	144.00	0.90	139.58
	4月	136.76	137.72	12.00	146.00	0.90	139.58
インド	3月	19.50	104.00	0.10	105.48	5.50	12.63
	4月	19.50	104.00	0.10	107.75	5.35	10.50
ロシア	3月	11.09	92.00	0.30	45.50	43.50	14.39
	4月	11.09	92.00	0.30	44.00	45.00	14.39
ウクライナ	3月	5.77	21.00	0.10	9.20	13.50	4.17
	4月	5.77	21.00	0.08	9.00	14.50	3.34

脚注１：粗粒穀物はとうもろこし、マイロ、大麦、燕麦、ライ麦等の計で約８０％がとうもろこしである。

脚注２：年度は穀物年度。地域・作物により異なる。例：アメリカ産とうもろこし、大豆：９月～８月。

世界主要国の農業と穀物需給の行方…インド(1)

- ① 今や世界一の人口14億人を抱えるインドの農業の現状と将来は、まさに混沌と魑魅魍魎の世界と言えるかも知れない。インドの農業を俯瞰すると、国土は328万km²で日本の約9倍、[表1]にある様にその農地面積158百万haと国土の約半分を占め世界一位/日本の約40倍、農家世帯数146百万戸と膨大且つ所有面積0.4ha以下の零細農家が約7割、平均農地面積1.08haと日本と大して変わらない。また、国土の約9割は北緯10-30度/東経70-90度に位置し、農業地帯は、[図1]の通り北部-中央インド「ヒンドスタン平野」と南インド「デカン高原」が中心となり米/小麦を主体とした生産を行い、平均降水量は1,000 mm、最高1万～最低100mmで洪水/旱魃が多発、気温差も激しい。インドはその広大さと宗教/民族/言語等も含めた多様性等から物事を標準化して表す言葉が中々見つからない。さながら、ヒンズー教聖地バラナシの全て飲み込んだドロドロとしたガンジス川の濁流の情景を想起させる。
- ② インド農業の中身を見ると、全労働人口に占める農業人口(2.6億人)は約55%とその存在は大きいが農家所得は非農家の1/3と劣悪、後継者不足、若者の他産業への転職、耕作放棄地の増大、機械化/生産資材利用進まず、市場流通における多数(7-8)の中間業者存在と搾取、流通途上の4割に及ぶ野菜/果物の廃棄率、結果農家所得は小売価格の1-3割等々、ある面では日本とも似たような問題も抱えているがカースト制度残渣による階層/女性差別なども含め問題を挙げればキリがない。ただ一方では、将来的には政府が進めている農業近代化や市場流通改革等による農業生産発展や食料市場拡大の可能性も秘めており、ある意味魅力的な市場ではある。しかし、逆にそれらの改革が進まず且つ気候変動等による食料減産或いは食料需給逼迫の場合は、現在の自給自足状態から一転して穀物輸入国に転換する要素も否定出来ず、ここ10年がどちらに振れるかを左右する局面を迎えている。後者の場合、世界の穀物需給の逼迫は避けられないが、海運業界にとっては新たな海上輸送拡大の可能性も考えられる。
- ③ インドの食料生産構造は、大きく言えば米と小麦生産を軸としてその他コーン/ジャガイモ/果物類それに牛乳生産から成り立っており、それで基本的に自給自足で14億人の食生活を支えている。また、インドは畜産に繋がるとうもろこし生産は微々たるもので産業としての存在感は無く、内容はモノカルチャー的生産構造である。[表2]では2016～20年まで5年間の品目別生産数量推移を示しているが米/小麦の2品目で農地面積の約6割を利用、20年生産量は米(精米ベース)で116百万ト(粳178×65%)、小麦108百万ト⇒合計224百万ト/米輸出約2千万トを除けば一人当たり約150kgと日本の約105kg(米7+小麦6=13百万ト÷1.25億人)と比べれば穀物消費量は約1.5倍、カロリー摂取の穀物割合が非常に高い。また、特徴として動物蛋白摂取は牛乳に頼っており、農産物貿易では、輸出は米が約20%(約2千万ト)と最大、輸入はパーム油等の油脂類が約50%近くと際立っている。(続く)

【表1】インドの所有面積別の各種データ

	世帯数(千世帯)			面積(千Ha)			1世帯当たり農地面積(Ha)		
	2005	2010	2015	2005	2010	2015	2005	2010	2015
零細	83,694	92,826	100,251	32,026	35,908	37,923	0.38	0.39	0.38
小規模	23,930	24,779	25,809	33,101	35,244	36,151	1.38	1.42	1.40
準中規模	14,127	13,896	13,993	37,898	37,705	37,619	2.68	2.71	2.69
中規模	6,375	5,875	5,561	36,583	33,828	31,810	5.74	5.76	5.72
大規模	1,096	973	838	18,715	16,907	14,314	17.08	17.38	17.07
合計	129,222	138,349	146,452	158,323	159,592	157,817	1.23	1.15	1.08

【表2】インド 主要農産物の生産状況 (単位：万ト)

	2016	2017	2018	2019	2020
コメ (粳)	16,370	16,850	17,472	17,765	17,831
小麦	9,229	9,851	9,987	10,360	10,759
とうもろこし	2,590	2,590	2,875	2,772	3,016
ジャガイモ	4,342	4,861	5,131	5,019	5,130
バナナ	2,914	3,048	3,081	3,046	3,150
綿実及び繰綿	1,731	1,743	1,466	1,856	1,773
生乳 (水牛)	8,127	8,626	9,182	9,200	9,003
生乳 (牛)	7,810	8,363	8,983	9,000	8,782

【図1】インドの農業(品目別分布)

